

県営かんがい排水事業
関連遺跡発掘調査報告書Ⅳ-1

— 蒲生郡安土町安土城城下町遺跡 —

1987・3

滋賀県教育委員会

財団 滋賀県文化財保護協会

県営かんがい排水事業
関連遺跡発掘調査報告書Ⅳ- 1
— 蒲生郡安土町安土城城下町遺跡 —

1987・3

滋賀県教育委員会

財団法人 滋賀県文化財保護協会

序

県下のは場整備事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査はすでに14年目を迎え、は場整備事業の拡大に伴う発掘調査件数の増加によって種々の資料や成果が蓄積されております。

発掘調査で得られた成果を公開し、広く埋蔵文化財に関する理解を深めていただく一助にしたいと、ここに昭和61年度に実施いたしました県営かんがい排水事業に伴う発掘調査の報告書を2分冊に分けて刊行するものであります。

最後に発掘調査にあたり、御協力いただきました地元関係者並びに関係諸機関に対し、厚く感謝の意を表すと共に報告書の刊行に御協力いただきました方々に対しても厚くお礼申し上げます。

昭和62年3月

滋賀県教育委員会

教育長 飯田 志農夫

例 言

1. 本書は県営かんがい排水事業（山本川第1工区工事）に伴う発掘調査報告書で、昭和61年度に発掘調査したものである。
2. 本調査は滋賀県農林部からの依頼により、滋賀県教育委員会を調査主体とし、(財)滋賀県文化財保護協会を調査機関として実施した。
3. 本書で使用した方位は磁針方位に基づき、高さについては東京湾の平均海面を基準にしている。
4. 本事業の事務局は次のとおりである。

滋賀県教育委員会

文化財保護課長	服部 正
課長補佐	田口宇一郎
埋蔵文化財係長	林 博通
” 主任技師	葛野 泰樹
管理係 主任主事	山本 徳樹

(財) 滋賀県文化財保護協会

理事長	南 光雄
事務局長	中島 良一
埋蔵文化財課長	近藤 滋
調査三係長	兼康 保明
総務課長	山下 弘
” 主任主事	松本 暢弘

5. 本書の執筆・編集は、兼康保明が行った。
6. 写真・図面については、滋賀県教育委員会で保管している。

目 次

序

例 言

1. 安土城下町	1
2. 調査の経過	
(1) 調査に至る経過	3
(2) 調査の方法	3
(3) 簡易写真実測	4
3. 調査地の景観	4
4. 石垣の調査	
(1) A地点の石垣	5
(2) B地点の石垣	7
5. 山本川河口の石垣の年代をめぐって	
(1) 石垣構築の技術面からの検討	8
(2) 石材と採石技術の検討	10
(3) 常楽寺港と山本川	12
(4) 結 語	13

図版目次

- 図版 1 安土城遠景
図版 2 山本川
 (上) 山本川河口全景
 (下) 山本川河口より上流を望む
図版 3 A地点石垣(1)
図版 4 A地点石垣(2)
 (上) 西隅・算木積み
 (下) 東隅
図版 5 A地点石垣(3)
 (上) 石積みの状況
 (下) 石垣の傾斜
図版 6 A地点石垣(4)
 (上) 基石下の横木
 (下) 矢穴のある石材
図版 7 B地点石垣(1)
図版 8 B地点石垣(2)
図版 9 B地点石垣(3)
図版 10 常楽寺港跡(1)
 (上) 常楽寺港跡現状
 (中) 常楽寺港跡より安土城を望む
 (下) 常楽寺港跡の穴太積み石垣
図版 11 常楽寺港跡(2)
 (上) 常楽寺港跡の石垣(1)
 (中) 同 上 (2)
 (下) 同 上 (3)
図版 12 調査地位置図
図版 13 明治 26 年地形図
図版 14 調査地詳細地形図
図版 15 A地点石垣西隅部分実測図

図面目次

- 図面 1 A地点石垣実測図
図面 2 B地点石垣実測図(1)
図面 3 B地点石垣実測図(2)
図面 4 B地点石垣実測図(3)
図面 5 B地点石垣実測図(4)
図面 6 B地点石垣実測図(5)
図面 7 B地点石垣実測図(6)

1. 安土城下町

天正4年(1576)、安土築城と同時に着手された城下町の建設は、織田信長が家臣の諸氏を安土に移住させ、さらに城下町の掟を定めて秩序の維持に努めたことから始まった。こうして湖東の一小聚落は、楽市楽座の政策など政治的な配慮もあって、たちまち各地からの物資の集散地となり、庶士が雲集し都市の形を整えていったのである。また、城下町を拡張するため、付近の沼沢地を埋立てたり、新たに川を掘鑿し西の湖と通じて舟運の便を開いたり、街衢を整理したりして荘麗な市街となっていた。信長の意図した城下町の経営は、このようにして天正8年頃にはほぼ完成したものとみられている。ところが、城下町の具体的なありさまについては、天正10年の本能寺の変以降、安土城が陥絶するまでの期間がきわめて短かかったことから、不明な点が多い。さらに、都市としての機能を失い一村落に急変したこととあいまって、現在の安土の地にはかつての栄華をほとんど地表にとどめていないのである。

それでは安土城下町の状況は、どのように推定されているのであろうか。

その一つの方法として、近江八幡の町割より安土城下町を類推する見解がある。天正13年、近江43万石を支配地とした豊臣秀次は、居城を近江八幡に定め、その城下に安土城下町と商人を移して新たな城下町を建設した。したがって、八幡城下町が安土城下町の町割を受継いだ可能性は、きわめて高いとみられている。江戸時代中期の、八幡の町の古図によれば、町は整然とした碁盤割である。このことから、安土城下町もまた同様な形式であったろうと推定されている。この町割は、今日見ることのできる城下町の、各所に軍事的な配慮のなされたありさまとは異なるものである。おそらく、中世の領国大名の城下で、「小京都」として京の景観を移す京都志向の残影とみることができる。^①

今一つの城下町の推定方法は、安土町下豊浦、上豊浦、常楽寺、慈恩寺などに残る小字や俗称地名を手がかりとするものである。著名なものとしては、早く『蒲生郡志』に紹介された、セミナリオの跡と思われる下豊浦の「ダイウス」の地名があげられる。その他、下豊浦の「女郎屋町」「本町市場」「寺町」、常楽寺の「博労町」「佐久間町」、慈恩寺の「鯛尾町」、小中の「鉄砲町」などが城下町の名残りととどめる地名といわれている。^②

このように地表ではとらえがたく、方法論的に限界のある安土城下町の探求を、安土町教育委員会では、下豊浦、上豊浦、常楽寺、香庄一帯を広く安土城域下町遺跡として線引きし、発掘調査によって実態の解明に取り組んでいる。なお、安土町教育委員会の報告書にみられる城下町に対する見解は、次のとおりである。

「織田信長が安土城築城とあわせて着手したとされる城下町づくりは、この丘陵地の北端部にあたる大字下豊浦、上豊浦、常楽寺と慈恩寺の一带にその中核をおいたものと考えられる。しかしかつて荷船などが頻繁に往来したであろう堀や運河は、現在では埋め立てられて道路に変わっていたり、あるいは雑草の生茂る沼地となっていたりという有様で、わずかに残されている小路や路地に城下町当時の区画が想像され、また小字名などによっておおよその町並みが推測されるばかりである。特に大字下豊浦の地先には「しゆのみざ（主之御座）」「だいうす（セミナリヨ）」、「敷来」、「しょうらいやき聖霊焼」などといった他地域には見られない字名が伝えられており、「おほふね大船戸」、「ももはし百々橋」などのかかってここに水路が入り組んでいて船着場や多くの橋がかかっていたことを連想させるものも認められるようである。これらとは別にその南西に位置する大字常楽寺には、「ほりきり掘切」、「ひらまほり百間堀」などに代表される石垣をめぐらせた運河が現在に残されており、そこに「みどうやしう御堂屋敷」、「かかやしう兜屋敷」といった広い敷地をもった家屋が建ち並んでいた様子をうかがうことができる。もっともこれらの字名・地名は安土の城下町において名付けられたものかどうかについての確証はなく、城下町の焼亡後新たに加えられたものも少なくないと思われる。

信長が安土の城下町の繁栄を図って施した政策に楽市楽座があげられるが、この楽市楽座に商人達を呼び寄せる方策として彼は新たに街道を設けている。これは当時東国への主要道であった東山道の往來を安土城下に引き込む目的のもので、安土山の南端部を切り通して城下町の下豊浦、上豊浦、常楽寺、慈恩寺の順で縫っており、近江八幡方面へと抜けているものである。楽市楽座はこの街道沿いに設けられていたものと考えられるが、城下町の規模ともあわせてそれがどの様な広がりを持っていたかは知られていない。ただ浄蔵院（慈恩寺）附近に推定されている「西の木戸」が城下町の西端となる可能性が考えられるのみである。^④

2. 調査の経過

(1) 調査に至る経過

今回調査の対象となったのは、蒲生郡安土町常楽寺地先山本川左岸の下流から河口にかけて遺存する石垣で、護岸工事によって新しく作られる土手の下に埋没するため調査を実施することになった。この石垣は、安土城下町遺跡の範囲内にあり、城下町に伴う遺構ということで、滋賀県教育委員会文化財保護課より滋賀県文化財保護協会へ調査依頼があった。そのため調査経費の積算を含む調査計画を立てるべく、工事前の協議に先立って安土町教育委員会に遺跡の案内を乞い、実際に現地を視察した。

現地踏査では、山本川下流に掛る自転車道の橋に近い調査時にA地点と呼称する高さ1.4 m程の整備された石垣に案内された。夏草や樹木の繁った状態での表面観察ではあったが、積み直しはあるものの比較的方形に石の面の整った石材を使用していることと、石垣の積み方から、安土桃山時代の石垣とするには問題があった。次にA地点の石垣より下流には、河口までの間延々と低い石積みが続き、これをB地点と呼んだ。ただB地点の石垣は、葦原の中にかろうじて石の頂部が認められる程度のきわめて低いもので、まだ土中に何石埋没しているのか確める必要があった。しかし、葦が茂っている現状での手掘りによる試掘は難しく、また時期的にみて石の間に蝨が潜んでおり危険という注意もあり、工事前に葦などを焼払ってから試掘した方が無難と判断した。だが、地表に見える石材の形や積み方は、時期不詳というものの、とても安土城の石垣とは異なる粗雑なものであった。現地を視察した感じとしては、A、B両地点の石垣が、はたして安土城下町と同時代の遺構であるかどうか疑問を抱かすに十分なものであった。

その後協議の結果、周知遺跡の範囲内でもあり、A、B両地点の石垣の年代を明確にさせるため、埋立て工事の前に調査を行って記録化することになった。

(2) 調査の方法

調査対象となった石垣は、山本川の護岸として現在も利用されており、石垣の前面に浅瀬があるというものの、川の水量が増えればたちまち石垣の基部が水没するような状態である。そのため工事に当っては、岸から川の中に鋼矢板を打込んで締切り、その中をポンプで排水して陸化することであったので、それを利用して石垣の立

面図を写真測量によって行うことにした。ところが、工事および調査を実施する段階になって、自転車道として整備が進められていた道路に、1 m以上の盛土工事がなされ、道路と石垣の頂部との間に著しい落差ができてしまった。そのため、護岸工事用の鋼矢板を打とうとすると、いったん石垣を山土で埋めて、高さを道路面と整えてからでないと工事を行うことができなくなった。そうした場合、鋼矢板内で石垣の撮影を行うには、いったん埋めた山土を除去して再度石垣を露出させねばならず、山土を除去する手間と埋立てによる石垣の損傷を考えると、矢板締切りが必ずしも調査にプラスになるものではなかった。

ただ幸いなことに、この年の11月は琵琶湖の異常洪水で水位が例年に比べ著しく低下しており、石垣はすべて基部まであらわれていた。そこで川の中程より、舟上あるいは直接浅瀬にカメラを固定させて撮影することにした。

撮影に先立って、石垣の基部の埋っている部分や、石垣前面の浅瀬に堆積している土や枝、根などは、工事側の協力でバックホーを使用して除去し、その後、スコップや移植小手を用いて石垣を清掃した。調査前には、石積みの状態が不明確であったB地点の石垣は、覆土を除去したところ石を数石積んだだけの簡単な構造であることが判った。ただ自転車道の盛土の裾部が、A、B両地点ともかなり石垣に接近しているため、石垣の裏込めを確認するトレンチが穿てず、これについては断念した。

調査は、11月17日に石垣の清掃および写真実測、18日に部分的に実測の補足作業を行い終了した。

(3) 簡易写真実測

平面は気球にカメラを吊下げ、側面は川の中程より舟上、あるいは直接川の浅瀬にカメラを固定させて、60%以上のラップを設けて撮影を行った。カメラは、ゼンザ・ブロニカSO-A・50mmレンズを用い、フィルムはコダックPCN 220を使用した。図化は2級図化機で、20分の1の測図を行った。ただ、A地点の石垣については、木の枝で隠れた部分があり、その部分については撮影後に手書きで補足した。

3. 調査地の景観

西の湖に注ぐ山本川の河口付近は、川の中央部に島状の浅瀬があり、葦が生茂って

あたかも中ノ島のような景観を示している。山本川の下流で石垣の認められるのは、左岸河口部より上流に約150m程の部分にすぎない。また、左岸には樹木も散在して繁茂するが、右岸は対照的に石垣はおろか樹木すら無く、一面の草原である。

工事前の山本川河口部の横断状況は、両岸から数m浅瀬があり、それより川の中央部に向かって急に深くなっている。川の中央部は、かつて常楽寺へマルコ舟など運送用の舟がひんばんに航行していたため、水深が確保されていたのであろう。しかし現在では、水の淀む浅瀬に近い水面には西の湖からホテイアオイが繁殖して水面を埋めつくしており、絶えず水の動いている川の中央部のみわずかに水面が認められ、水路と判るような状態であった。

石垣は、本調査では便宜上、自転車道の橋のすぐ下流に認められる高さ約1.4m程の整備された石垣をA地点。また、A地点の石垣より下流から河口まで続く、石を数石積んだだけのものをB地点と呼称した。左岸で石垣以外に注意をひいたのは樹木で、石垣前面の浅瀬に河口部、B地点石垣の中程、A地点石垣の西端、中程、東端にある。これらの樹木は、西の湖より山本川へ舟で上る際の日標であったと思われる。

河口部は、現在は西の湖まで水田と化しているが、明治26年の2万分の1の仮製図をみると、まだ水田化しておらず、おそらく近年まで湿地であったのだろう。

4. 石垣の調査

(1) A地点の石垣

規模 石垣は、川沿いに全長約35.8mにわたって築かれており、下流にあたる西端で約2.8m直角に入込んでいる。西端は明瞭な石積みであるが、東端は残りが悪くかろうじて端であることが確認できるような状態である。石垣の遺存状況は、中央部より西側では、基部から頂部まで完全に残っている。高さは西隅が最も高く5石を積み、約1.7mである。頂部まで残っている部分も、隅と同様5石積みで、高さ約1.4～1.5mを測り、東側の頂部の崩れた部分では、基部より2～3石を残し、高さは約70cm程である。この現状の計測値からみて、実際は地形や石材などによって制約をうけているが、当初は全長20間（約36m）、高さ1間（約1.8m）の石垣を意図していたのであろう。

積み方 石垣の積み方は、西隅では算木積みの形式を採っているが、城の石垣などにみられるように、隅のために特に大きい石や特別に整形した石を用いてはいない。ここでは、石垣に用いられている石の中で、大きめの石を利用しているにすぎない。東隅は、基部より3石を残して上半部が崩れて旧状をとどめていないが、基石の状況からみて西隅のような算木積みではなく、石垣全体の積み方と同じ工法であったと推定できる。

石垣全体の石の積み方は、現状で布積み（横積み）と落し積みの二種類の工法が認められる。しかし、石垣を築くにあたって二種類の積み方を併用するとは考えられず、一方の工法が補修時のものとみるのが妥当である。この石垣に共通する石の用い方としては、全体に残る基部付近の石積みの状況からみると、基石には比較的大きめの石か、石の面が横長になるようなものを用いている。こうした石の用い方から考えると、基石を積直ししないかぎり、同様な石の用い方をその上に順次行はずである。このことから、石垣はまず布積みによって築かれたと判断して誤りあるまい。ただ、使用した石材が完全な切石でなく、大きさや形状も雑多なため、横積みの状況もかなり乱れたものになっている。一方、落し積みを行っている部分を観察すると、基石が半石から一石分だけ、当初の基部のラインより前へ出ていたり（図面1）、あるいは基石の据え方が石の面をあまり考慮せず、乱れた配置になるものなどが認められる。こうした点からみても、落し積みが布積みより後に行われたものであることは明白である。

以上の点から石垣の積み方を整理すると、まず布積みによって石垣が築かれる。その後、石垣の一部がはらんだり崩れたりしたので、その部分を落し積みで積直して補修する。補修時の石材は、工法が変わるので少量補充がなされたかもしれないが、大部分は当初使用されていた石材を用いている。さらに補修の後、石垣の頂部に、間知石のような石材の面が整った石をならべて、高さを調整している。この石については、当初の石垣の石材を転用したものではなく、新たに持込んだものである。横断面で見ると、石垣全体が勾配を持っているのに対し、頂部のみ石の面が垂直になるなど違和感があるのは、まさに後補によるためであろう。

石垣の基礎には、表面からの観察では基石を固定するための施設は認められなかった。ただし、落し積み部分の基石下に横木（丸太か）が置かれていた。おそらくこの部分のみ、先にもみたように基石が半石から一石前方へ飛出しているため、補修による積直しでもあり、石が湿地に沈むことを防ぐ意味で、基礎に横木を置いたものと推

定される。

石垣の裏込めの有無については、石垣に直交するトレンチが道路の盛土がじゃまになり掘れなかったため確認できなかった。

石 材 石垣に使用している石材の大半は、間知石のように規格化されておらず、石の節理を利用して石の面をある程度整えただけのものである。ただ、補修の際に石垣の頂部に置かれた石材は、多少不揃いではあるが、石の面が一尺角に規格化されており、間知石そのものではないがそれを意識したものである。

石垣中の石材で注意をひくものは、矢穴跡を残しているものがあることである。明確なものとしては、連続した矢穴跡が残っているものが数石あり、しかも石垣の基部近くに用いられている。連続した矢穴を利用した石の割り方はある程度年代を把握でき、しかも補修されていない部分の石材にみられることは、この石垣の年代を決定する一つのポイントといえよう。

石垣を構成する個々の石材の奥行きは、石垣を解体していないため明確ではないが、西隅の算木積みの部分より推定すれば、石の面に対して控え（奥行き）は約1.5倍程度とみておけばよいであろう。

石の種類は大半が花崗岩で、南湖の湖岸や大津市内の石垣に多く用いられている、近江八幡市沖島産の石英斑岩は、距離が近いにもかかわらずまったく使用されていなかった。石材については専門家の鑑定をうけていないので、詳細な産地については断定できないが、湖東であれば近江八幡市岩倉、湖西なら比良山麓の高島、志賀といった所の花崗岩が産地の候補にあげられよう。

(2) B地点の石垣

B地点の石垣は、A地点の石垣の西端より約17m程下流から始まり、2～3石の石積みが延々約95m程河口部まで続く。石の並びは、河口に向かって直線的に置かれているが、河口部の拡がりに合せて緩やかな曲線を描いている。河口部は、樹木と石積みの崩れがはなはだしく、図化不能の状態であった。石の並びは、途中2カ所張出し部があるが、ここでも自転車道の盛土にじゃまされてトレンチが掘れなかったため、当初からこの部分が川の中へ張出していたのか、あるいはこの部分が後補によるものかは確認できなかった。

石垣は、各部とも高さ約50～70cmを測り、2～3石を積む。石の積み方は粗雑で、

一般的な石垣にみられるような規則性はなく、頂部も整えられていない。しいて石の積み方の共通点をあげれば、上流部で基石を横長になるように使用している程度であるが、それさえも全域にわたるものではない。その部分に関していえば、大きさの一定しない石材を用いる場合のごく自然な置き方で、とりたてて特色や規則性として捕えるまでもないであろう。ただ、このように部分的に石積みと相違がみられるのは、長い石垣を何回かに分けて構築した際、その都度入手できた石材の形などによって変るのか、あるいは一度に何人かが地区を決めて作業したため、部分的に個性があらわれたかであろう。つまり、B地点の石垣は、石垣というよりも石積みとでも呼ぶべきもので、入手できた石を形態に応じて積み易いように置いて行った、技術的にも幼稚なものである。そのため、石材の形も均一ではなく、ありあわせの屑石を用いたもので、石の種類もA地点の石垣のように花崗岩を主体にしたものではなく、何種類もの石質が認められた。

A、B両地点の石垣に用いられる石材で共通する点として、石塔や板碑・石仏など石造美術、石臼、建築用の基礎材・礎石などの転用がまったくみられなかったことを付加しておきたい。

5. 山本川河口の石垣の年代をめぐって

(1) 石垣構築の技術面からの検討

調査したA、B両地点の石垣の構築年代を探るため、技術面から検討を加えてみたい。そのため山本川左岸の石垣と、安土城の石垣（黒金門より二の丸下郭部）^⑧を比較してみよう。

まず安土城の石垣では、使用される石材の大部分が野面石かその割石を積んでいることを特色の一つとしてあげることができる。また、石垣の修理工事の知見によれば、石塔などの部材も多く転用されている。一方、山本川の石垣は、A地点では野面石ではなく、粗割り加工の施された石材である。また、石垣中に混じる連続した矢穴跡を残す石材から、山出した大割りの石材を粗いながらも用途に合わせて小割りしていることが判る。こうしてみると、一見雑多に見える石材も、ある程度の加工がなされ、石垣用石材として大きさにまとまりをもっている。ここでは、石塔など転用の石材は、

一切用いられていなかった。石質は、安土城もA地点の石垣も、共に花崗岩かその系統の岩石を用いているが、野面石と広義の切石である点に大きな相違をみるのである。同じ石質を用いても、石材の違いが石垣の積み方にまで反映している。

石垣の工法をみると、安土城では隅の算木積みは、野面のまま不均衡な外観を示しており、その様式がようやく完成した初期のものである。それに対してA地点の算木積みは、完成した後の形骸化したもので、技術としてみるべきものはなく、きわめて後出的である。石垣全体の積み方は、野面石か切石か使用する石材によってかなり変化する。安土城の場合、野面石を布積みのように横へ寝かせ、一段ごとに積みあげるが、石垣の高さによって石の面が整わず乱石積みになる。また、石の面が規格化された切石と異なり、石の組合せに規則性は生まれず、使用された個々の石の形態によってきわめて個性的なものになる。石と石のすきまを埋めるため、詰め石が行われる。ただし、小さな詰め石が抜けても、大きな野面石は控えの奥の部分でそれぞれ噛合っており、それによって石積みが保たれている。したがって石の控えは深く、ゴボウ積みとよばれる構造である。このような安土城の石垣にみられるような石の積み方を、城郭研究者は穴太積みと呼んでいる。一方A地点の石垣は、野面石に比べれば石の形が整っており、石を横長に寝かせ水平にならべながら積上げている。ところが、間知石のように石の面が整っていないことから、レンガ積みのように水平に積まれた布積みとはならず、かなり石の形に規制されてならびが乱れている。しかし、石の噛み方は、野面石のように控えて噛合っているのではなく、間知石積みのように目地を合わせながら積んでいる。そのため石垣の正面からみると、ほとんど控えはみえない。石材の控えは、隅の石から判断してそう長いものではなく、ゴボウ積みのような崩れにくい積み方ではなく、見かけを良くして、厚さを節約した作りである。この点についても、算木積みと同様、簡略になって形骸化した石垣の姿が認められる。

以上、安土城とA地点の石垣を比較したが、あらゆる点で相違が著しい。もっとも、城郭の高石垣と川の護岸の石垣とでは、比較の対象があまりにもかけ離れているとの指摘がなされるかもしれない。しかし、技術という面からみれば、工事の大小にかかわらず基本的な技術にもっと共通点があってしかるべきである。この技術的な相違を、石垣の時代差とみたのである。城郭の石垣にみられる年代観や、採石の技法をみる限りでは、A地点の石垣の年代はおそらく江戸時代後期以降のものであろう。

B地点の石垣については、あまりにも簡単な構造のためどの時期においても構築が可能である。ただ、使用石材にはA地点と同様な石材も混っており、古い時代のものでないことは明白である。

(2) 石材と採石技術の検討

ここでは、石垣に用いられる石材を、採石技術からさらに検討を加えたい。

石垣に使用する石材は、基本的には切石（加工石材）と野面石（自然石）の二者に分けられる。加工石材は、石の各面を平滑に整形したものを最も完成された形とするが、一般的には間知石とよばれる截頭四角錐状の石垣用石材がその代表としてあげられる。しかし、広義に解釈するなら、粗い整形ながらもある程度石の面に規格性をもたせているものをも含めて良いであろう。次に野面石は、土中より掘出された石塊や岩盤より崩れた石塊などを、ほぼそのままの状態で使用するものを基本とする。しかし、面をそろえるために真っ二つに割ったものや、石の噛合せに合わせて部分的に加工を施したものをも含めておきたい。

さて、安土城や豊臣氏大坂城^⑦の石垣をはじめ、中世から近世初頭の城郭の石垣をみると、野面石が多用されている。これらの石垣には、しばしば石塔などが転用して用いられており、その工事が急がれていたことの反映と説く者もある。しかし、単に早く多量に石材を集めるという理由から、野面石が集められたのであろうか。戦国の覇者たる信長や秀吉の、その政治力、経済力を結集した安土城、大坂城の石垣をそのように簡単に言いきることはできないであろう。それでは、野面石の多用をどのように考えると良いのであろうか。その最大の理由は、花崗岩など硬質の石材の切出し技術に起因している。

花崗岩の加工技術については、鎌倉時代を境にして技術革新がおり、以後近畿地方では石造美術の素材として好んで用いられている。県下全域にわたって花崗岩の入手が容易な近江では、地域の文化的、経済的資質の高さから、中世全期間を通じて石造美術の造立が栄えた土地柄であった。こうした背景から、良質の石材産地を中心に作風の異なる石大工の存在が抽出されている。この石造美術の文化圏より、田岡香逸氏は早くから蒲生郡日野町蔵王にあるかったい谷に、中世の花崗岩の石切場があったことを指摘していた^⑧。かったい谷の「石切場」は、その後の調査により興味深い事実が明らかにされている^⑨。まず谷には、岩場に採掘跡が残されておらず、今日みられる

ような丁場のある石切場とは様相の異なるものであることが判った。おそらくこの谷での採石作業は、岩場に採掘跡のないことからみて、土中の玉石や転石を掘出し、運搬しやすい大きさに粗割りを行ったと推定している。こうして山出しされた石材は、石造美術として加工する際はほぼ全体を整形するため原石肌を残すことが少なく、したがって加工前の姿を完成品から推測することもなかったのである。ところが改めて石造美術に原石肌の痕跡を求めると、五輪塔や層塔の笠の裏面や小形板碑の背面などに、かなり高い割合で見出せるのである^⑩。このことは、日野藏王の花崗岩に限らず県下各地の花崗岩をはじめ、湖東流紋岩など硬質の岩石すべてにおよんでいる。石造美術をみる限りにおいては、小形の組合せ式の五輪塔や小形板碑などが急激に増加する室町時代後期においても、硬質石材を石切場から多量に規格化して切出す技術は完成されていなかったのである。安土築城に際して野面石を多用したのは、中世の採石法によるため、近江八幡市岩倉や沖島など隣接した豊富な石材産地を持ちながらも、多量の石材を切出すことができなかったのは、技術的に岩盤から切出せなかったために他ならない。

中世の硬質石材の採石が、今日みるところの石切場と大きく異なれば、当然そこで行われる石の加工技術にも相違が認められるのはいうまでもない。ここで特に注意を払いたいのは、矢穴の存在である。矢穴は、石の目に添って穿ち、そこに矢を入れて槌で打って石を割るのに重要な役割をはたすものである。その出現は早く、古墳時代から行われていたようではあるが、特に注意が払われていないことと相俟って事例は極めて少ない^⑪。しかも、石造美術の製作の盛んになる中世においても、ほとんどその例を知ることはない。中世の加工では、原石を削りながら整形して行く方法が主流を占めていたためであろう。矢穴の存在が再び認められるようになるのは城郭の石垣において、安土城の石垣にはあるといわれている。近世初頭の築城ラッシュと、そこへ供給される石垣用石材の大量確保が、岩盤からの石の切出しや小割りなどに技術革新をもたらしたのであろう。こうして定着した石切りの技術は、単に城郭の石材だけでなく、石造美術など石材工芸の分野にも大きな影響をおよぼしている。それは、落石などにみられるように、切石による規格化であった。切石技術の民間への定着は、元禄3年(1700)刊の『人倫訓蒙図彙』に、切石の石材に連続した矢穴をあげ、そこに矢を打込んで石を割ろうとしている図があり、すでにこの時期には普及していたと

思われる。

硬質石材の岩盤からの切出し、切石技術の一般化、矢穴による割削技法など、それらの組合せは江戸時代になって完成されたものと理解して良いであろう。

(3) 常楽寺港と山本川

石垣の技術的な面からの検討より、山本川下流の石垣が、当初考えられていたような安土城下町に伴うものではなく、江戸時代以降に構築されたものであることが明らかになった。しかし、技術面からの検討は、現状ではここまでが一つの限界である。そこで、次に常楽寺港や山本川の歴史的背景をふまえながら、さらに年代の検討を進めてみよう。

常楽寺の港は、鉄道など陸上輸送が発達するまでの、湖東の水上輸送の拠点であった。大中之湖をはじめとする安土の内湖には、七浦とよばれる7つの港があり、当地域の湖上交通に重要な役割をはたしていた。安土には常楽寺と豊浦の2つの港があり、常楽寺は主に農産物など貨物を中心に荷物の取扱量も多く、豊浦は長命寺からの巡礼舟や一般の荷物の取扱いがなされ、常楽寺に対しては副次的な役割をはたしていた。常楽寺の港が記録にあらわれるのは江戸時代になってからで、古くは観音寺文書に慶長6年(1601)54艘、延宝5年(1677)48艘の舟を所有していたことが記されている。しかし、水運としての記録がひんばんに認められるようになるのは、江戸時代後期以降明治にかけてのことである。^⑧

常楽寺港は現在完全に機能を停止し見る影もないが、かつては常浜とよばれ、昭和のはじめ頃まで大津行の舟便があり、夜出発して朝に大津へ到着したという。この港の主な取扱いは、湖東地方の米など農産物の積出しと、対岸の湖西から小松石(花崗岩)を陸上げすることであった。石の陸上げに伴って、常楽寺には運んできた石を加工する石工が3人程いたという。また、大正以降には、庭石も運ばれるようになった。このように貨物の量の多い港には、マルコ舟もひんばんに航行しており、山本川は荷を積んだ舟が往来するのに適した水深の深い川であった。同じように西の湖にも航路帯があり、琵琶湖の水位の低下に関係なく吃水の下った舟が航行できるように配慮がなされている。このようにみると、山本川左岸の下流河口付近の樹木は、西の湖から山本川へ入るための目印であったことは疑いない。また、右岸に植樹がされていないのは、水位が低下した時、片引きといって岸から舟を引いて常楽寺港まで上げて

行くための土手であったのかもしれない。常楽寺の港の跡には、現在も石垣が残されているが、場所によって積み方も布積みであったり、落し積みであったり一定しない^④。しかし、使用されている石材は、広義のものも含め切石を用いており、中に連続矢穴跡を残すものも混っている。石垣の工法や石材からみて、江戸時代も古く遡らせることは無理であろう。本来は常浜の名のとおり浜へ荷上げしていたものが、貨物の取扱いがひんばんになって石垣に整備されていったものであろう。したがって、歴史的にみても江戸時代以降のことである。

以上の諸点を勘案してA地点の石垣を検討してみよう。明治26年の仮製図では、この地点より河口部にかけて湿地帯であることから、おそらく河口に築かれた石垣であったのだろう。石垣の側に植えられている柳などは、先にものべたように河口の日印として最適である。石垣に用いられている石材に小松石が使用されているなら、小松石が江戸時代中期以降切出され、江戸時代末期から明治にかけて多量に流通することから、石垣の年代をある程度絞ることが可能である。いずれにせよA地点の石垣は、常楽寺港の航路と切っても切離せない関係にあり、常楽寺港の石垣と同年代かそれ以降のものと考えられるべきものである。そうした点を考慮に入れるならば、古くとも江戸時代末期を遡るものではなく、新しくとも明治時代に築かれたものであろう。今回の調査では、常楽寺の古文書などの調査を行わなかったため年代に幅をもたせたが、記録によってより正確な年代が決定できるものと確信している。

B地点の石垣は、結論的に言えば南湖東岸の湖岸や内湖岸各所にみられる護岸の石積み^⑤と大差のないものである。これも当初考えられていたような、安土城下町に伴うものではない。おそらく南湖東岸の湖岸の石垣や石積みの技術から推察して、近代になってからのもので、積み方も素人臭く、農作業の片手間に積まれたものであろう。湖岸沿いの湿地が水田化されるようになるのは、明治38年の南郷洗堰改修以降の水位の安定化後であることはすでにのべた^⑥。B地点の石垣は、おそらく昭和17年(1942)に着工した小中之湖の干拓工事とあまり変らぬころの、湿地帯の再開発に伴うものであろう。また仮にそれ以降としても、他地域の例からみて昭和30年代を下ることはあるまい。

(4) 結 語

以上、山本川下流に築かれた石垣について、石垣構築の技術、石材と採石技術、常

楽寺港とその歴史的背景などから検討を加えた。その結果、石垣は当初考えられていたような安土城下町に伴うものではなく、年代的にはA地点が江戸時代末期以降明治時代、B地点が太平洋戦争中のものと推定した。おそらく両地点とも、記録や伝承者が存在するであろう。

調査としては、今回石垣の実測以外行うことはできなかったが、やり残した問題点について記し今後の検討課題としたい。

今回予定していながら実施できなかったのは、石垣の断割りである。これによって石材の控えの長さや石の噛み具合、あるいは裏込め、石垣下の基礎工の有無とその状況が明らかになろう。石材の控えの長さや石の噛み具合については、すでにのべているので略すが、裏込めについては、石垣の排水の問題とも関係する。石垣の排水が悪いとほらみが生じ、崩壊につながるため、各地域、環境、用途、時代によって相違があるのかどうか、これまであまり検討されていない問題であるだけに比較対象の必要があろう。県下の知見をあげれば、慶長8年(1603)に起工、同11年に完成した彦根城天守の石垣には、ていねいすぎる程の裏込めが行われている。一方、寛永19年(1642)に再建された延暦寺根本中堂の背面に築かれた石垣は、建物と同年代のものとして推定されるが、昭和61年の積みかえ工事で裏込めのないことが確認されている^⑩。また、草津市志那の湖岸に残る低い石垣^⑪も、戦後のものではあるが裏込めはなされていなかった。それに対して、同様な性格をもつ東浅井郡湖北町延勝寺の石垣(明治時代)には、栗石による裏込めが行われている^⑫。

次に石垣下の基礎工事については、地盤が軟弱な場合さまざまな方法が行われている。例えば城郭の高石垣の場合、基石下に栗石を敷いたり、版築を行ったり、あるいは胴木を入れたりかなり大がかりな工事が行われている。その反面、一般的な石垣や石積みの場合整地程度の工事でまかせているものも多く、基石の下に丸太を敷いて沈むのを防いだり、あるいは基石の前に丸太などを置いて杭で固定しすべり止めになっているものもある。これも、地域、環境、用途、時代によって相違があるのかどうか、改めて検討の必要があろう。

石垣が安土城下町に伴うものと誤認された原因は、山本川の下流に信長の渡った浅瀬があるとの伝承と、地上に残っている施設とが結びついたためであろう。

城郭の調査や中・近世遺跡の調査の増加によって、石垣も考古学的な調査の対象と

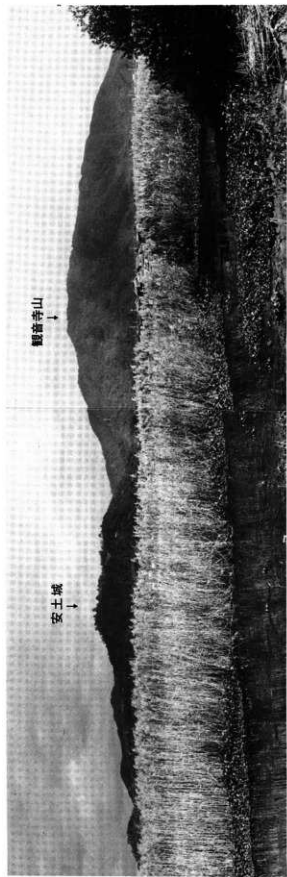
なってきた。しかし、地上に残る石垣については、必ずしも構築当初のままではなく、積直しがなされている可能性もある。また中世の城跡に、近世以降シン垣や砂防用の石垣が築かれる場合や、水田や畑の石垣を誤認する例も少なくない。石垣の年代決定については、多角的な視野と慎重な検討が望まれる。

註

- ① 林屋辰三郎『日本歴史』12（中央公論社 1966）194頁。
- ② 石川正和「蒲生郡安土町」（『角川日本地名大辞典』25・滋賀県 角川書店 1979）890頁。
- ③ 『昭和60年度 滋賀県遺跡地図』（滋賀県教育委員会 1986）
- ④ 「十七遺跡発掘調査報告書」（安土町埋蔵文化財報告書第5集 安土町教育委員会 1986）6～7頁。
- ⑤ 『特別史跡安土城跡修理工事報告書』（滋賀県教育委員会 1965）
- ⑥ 北垣聡一郎「石垣普請」（法政大学出版局 1987）188～190頁。
- ⑦ 鈴木秀典『特別史跡大坂城跡 — 大坂城内配水池改良工事に伴う発掘調査概報 —』（大阪市文化財協会 1985）
- ⑧ 田岡香逸「近江の石造美術」3（民俗文化研究会 1976）142頁。
同 「近江歳王の石造文化圏 付石大工平景吉の系譜とその作品」1～5（『民俗文化』195～199 滋賀民俗学会 1979～1980）1917頁。
- ⑨ 兼康保明「中世の花崗岩石切場を訪ねて — 滋賀県蒲生郡日野町蔵于勝手谷踏査記 —」（『関西学院考古』8 関西学院大学考古学研究会 1987）
- ⑩ 兼康保明「赤土寺石造七重塔の新知見」（『滋賀考古学論叢』3 滋賀考古学論叢刊行会 1986）
- ⑪ 奥田 尚「巨石の切り出し技術」（『季刊 考古学』3 雄山閣出版 1983）
- ⑫ 常楽寺港の調査については、杉立繁男氏の協力を得た。
- ⑬ 『滋賀県百科事典』（大和書房 1984）には、「港に穴太積みの石垣が残る」（399～400頁）とあるが、近年安土町が開催した穴太衆流技法石垣石積工養成講座の受講生の施行したもので、江戸時代に遡るものはない。
- ⑭ 奈良俊哉・兼康保明『志那漁港工区発掘調査概要報告書』（滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 1986）
- ⑮ 注⑭に同じ。9頁。
- ⑯ 滋賀県教育委員会文化財保護課建造物係辻康三専門員の御教示による。
- ⑰ 昭和60年度（注⑭）、61年度の滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会の調査による知見。
- ⑱ 奈良俊哉『延勝寺湖底遺跡発掘調査報告書』（滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 1985）13～14頁、図版13。



图 版



山本川河口より安土城を望む



山本川河口全景



山本川河口より上流を望む



(上流)

石垣正面

(下流)



西隅・算木積



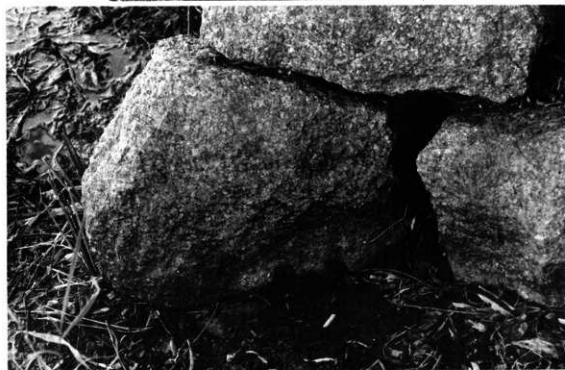
東隅



石積み
の状況



石垣の傾斜



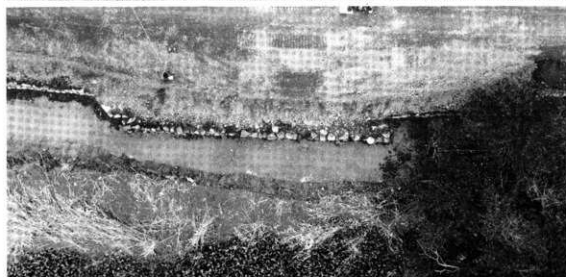
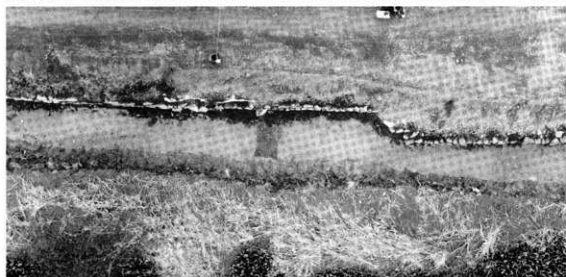
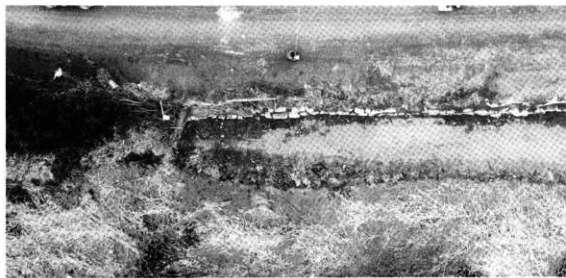
(上) 基石下の横木

(下) 矢穴のある石材



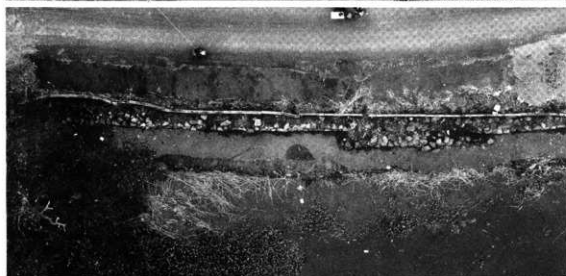
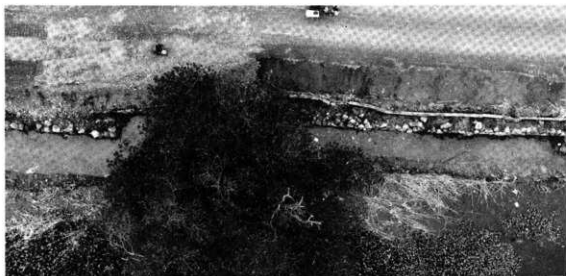
石垣正面 (下流)

(上流)



(上流)

(下流)



(上流)

(下流)



常楽寺港跡現状



常楽寺港跡より安土城を望む



常楽寺港跡の穴太積み石垣

常楽寺港跡の石垣(1)

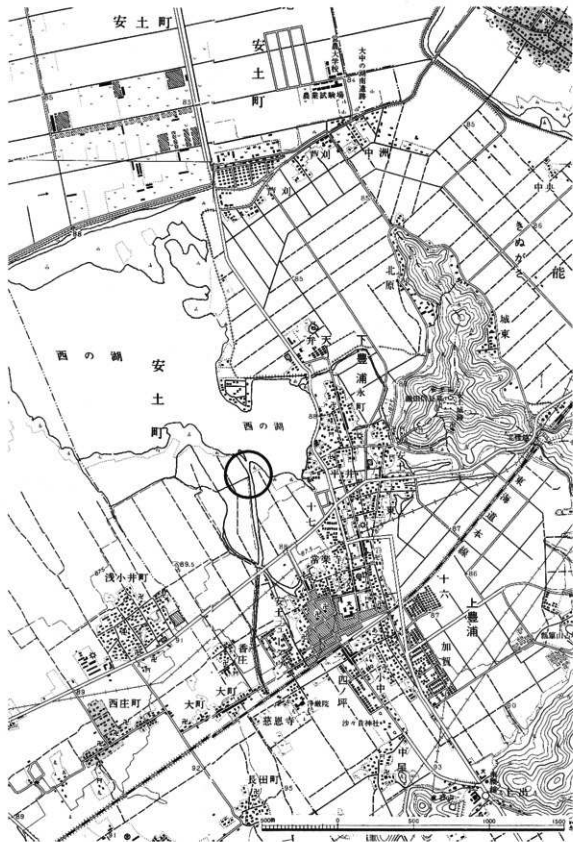


同上 (2)



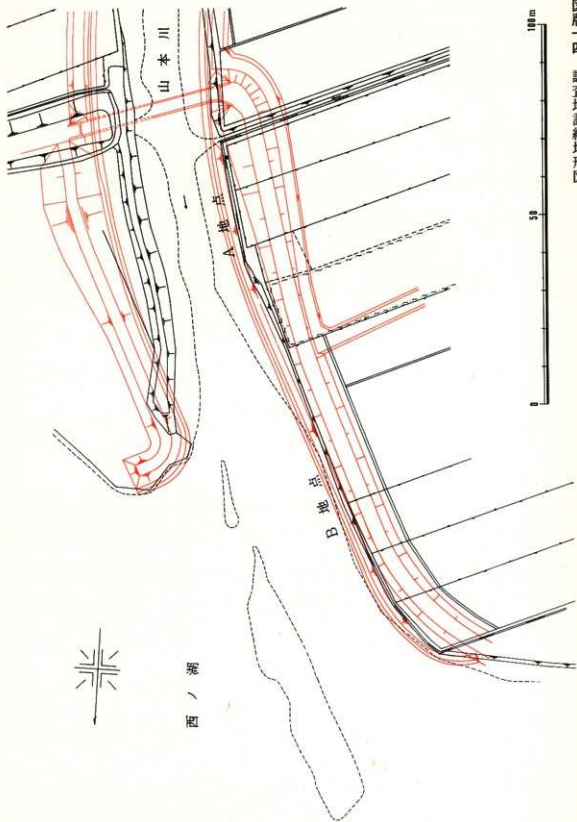
同上 (3)

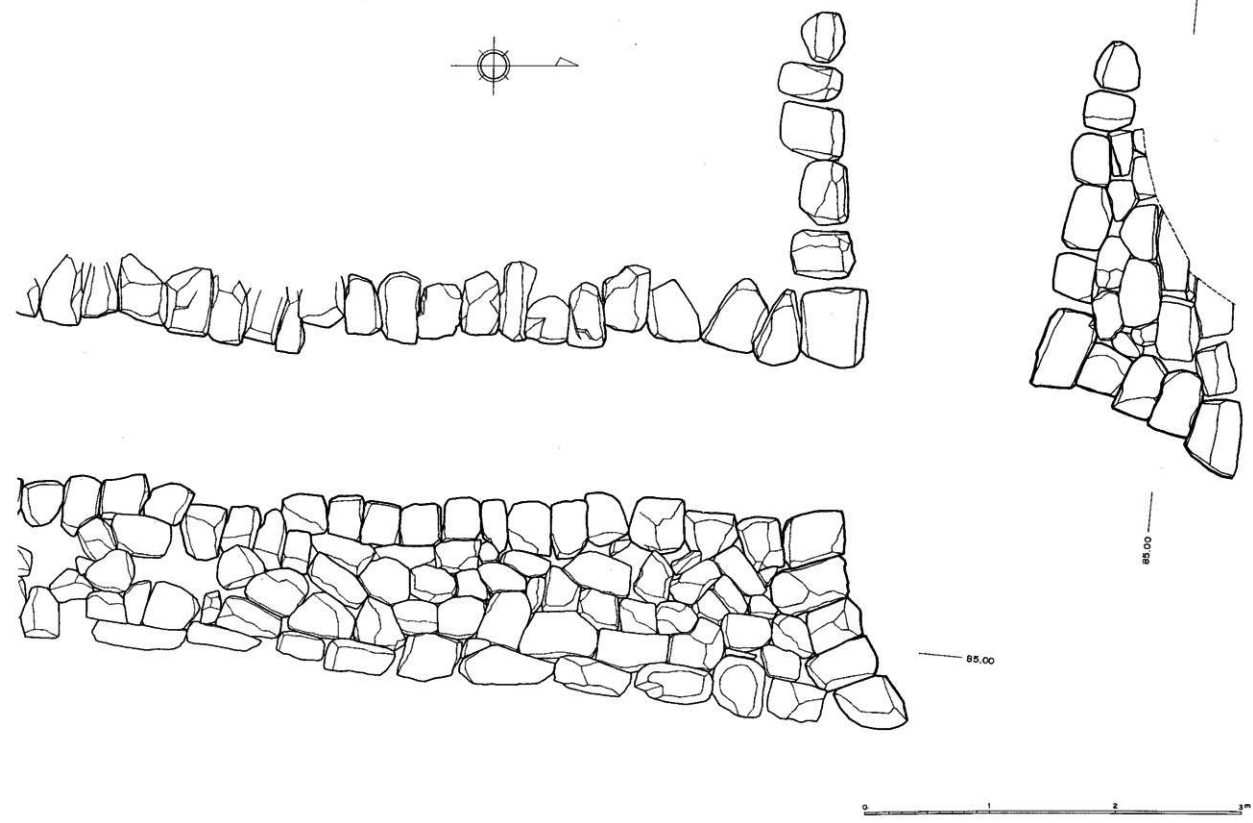






(2万分の1)





昭和62年3月

県営かんがい排水事業

関連遺跡発掘調査報告書Ⅳ-1

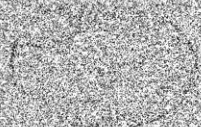
編集・発行 滋賀県教育委員会文化部文化財保護課
大津市京町四丁目1番1号
Tel (0775) 24-1121

財団法人 滋賀県文化財保護協会
大津市瀬田南大萱町1732-2
Tel (0775) 48-9780-9781

印刷所 富士出版印刷株式会社
大津市札の辻4-20

安土城城下町遺跡

圖 面

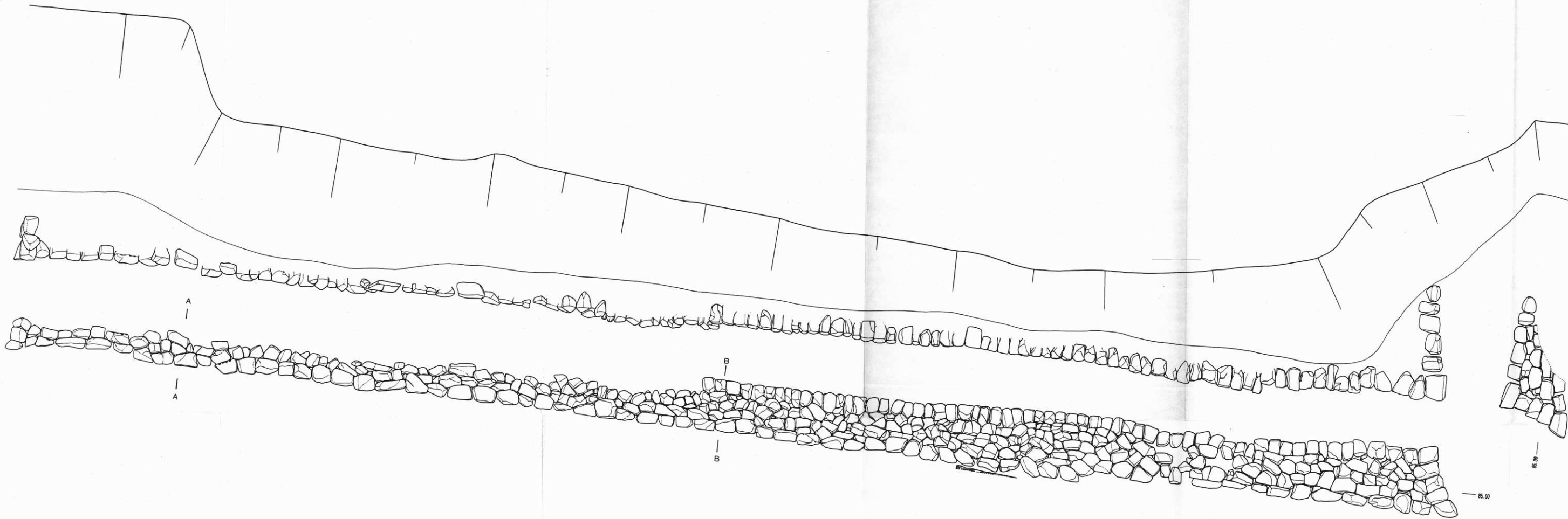
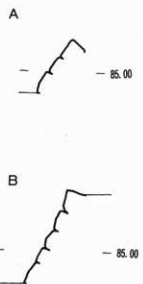
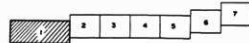


1012

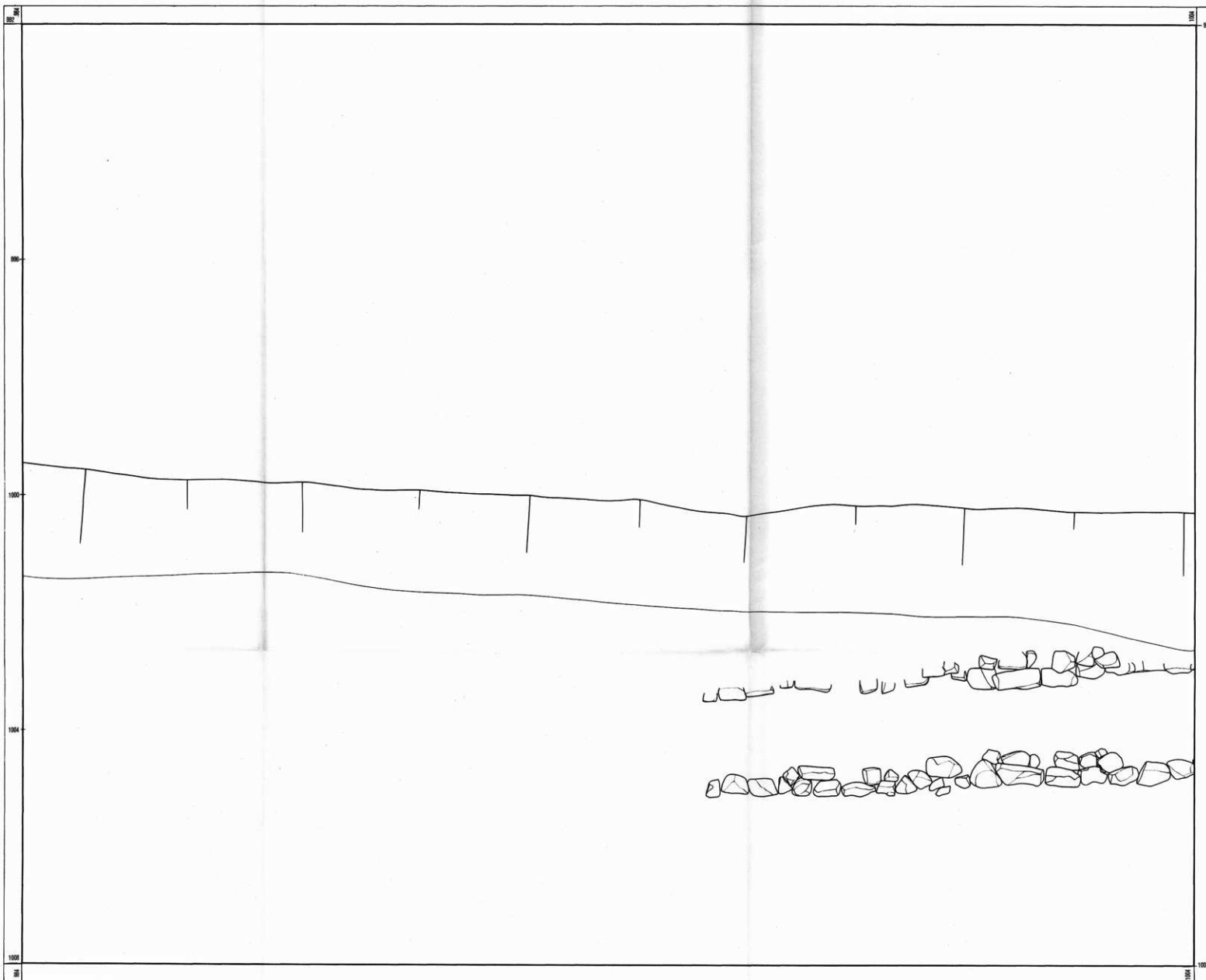
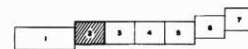
1012

安土城下町遺跡

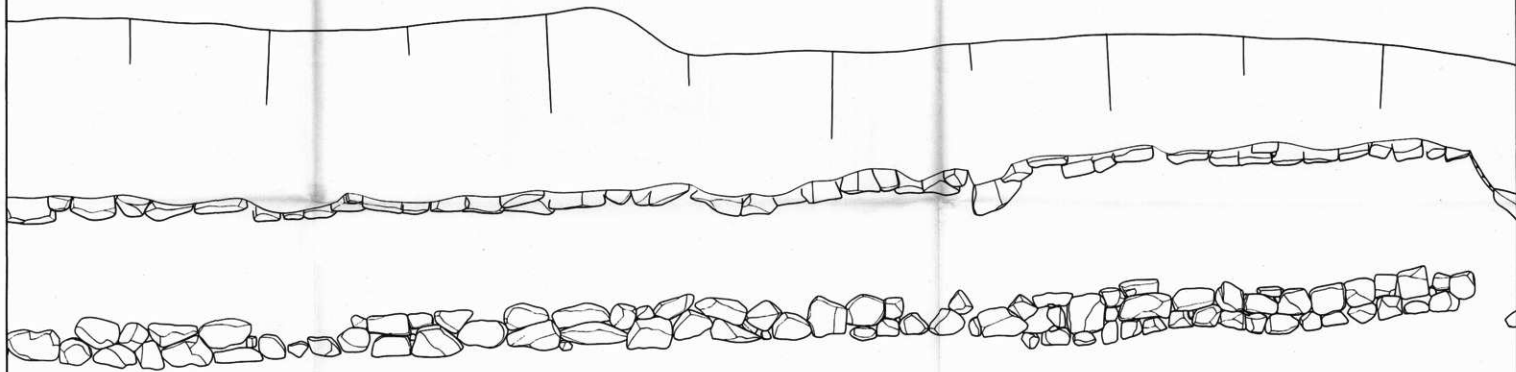
A地点石垣実測図



安土城城下町遺跡
B地点石垣実測図(1)



安土城城下町遺跡
B地点石垣実測図2)



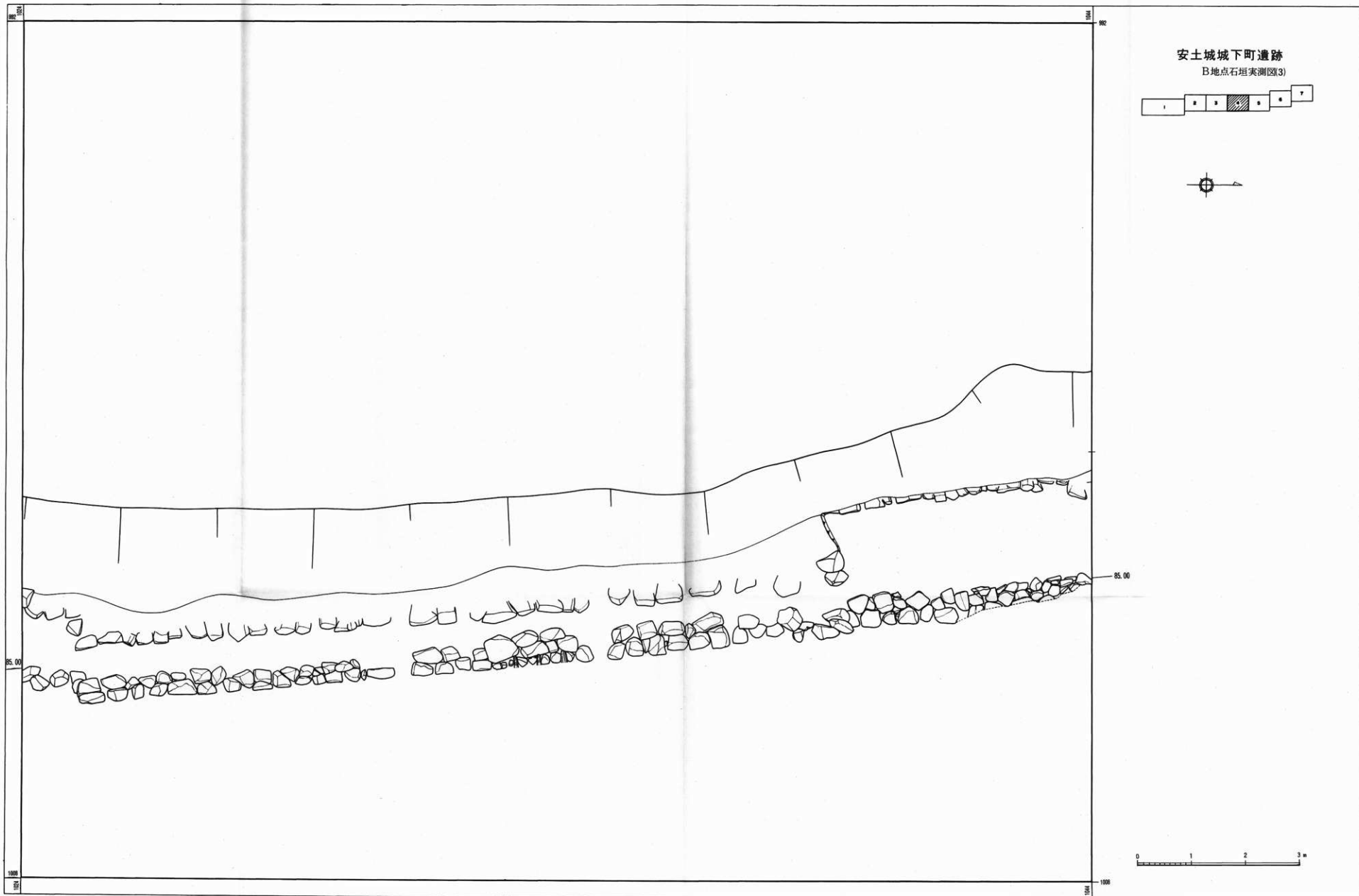
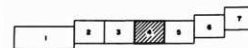
85.00



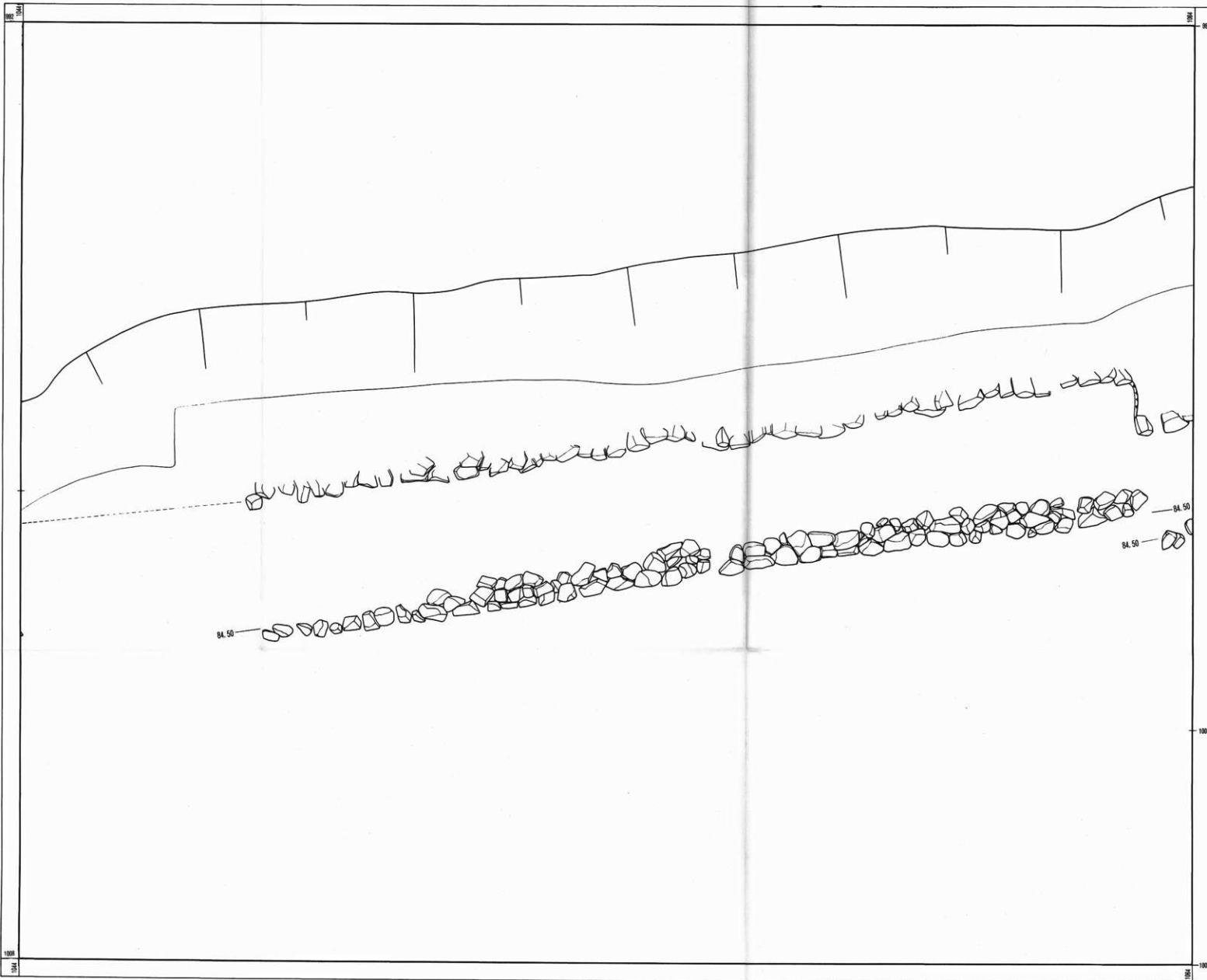
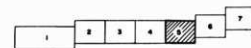
1000
1000

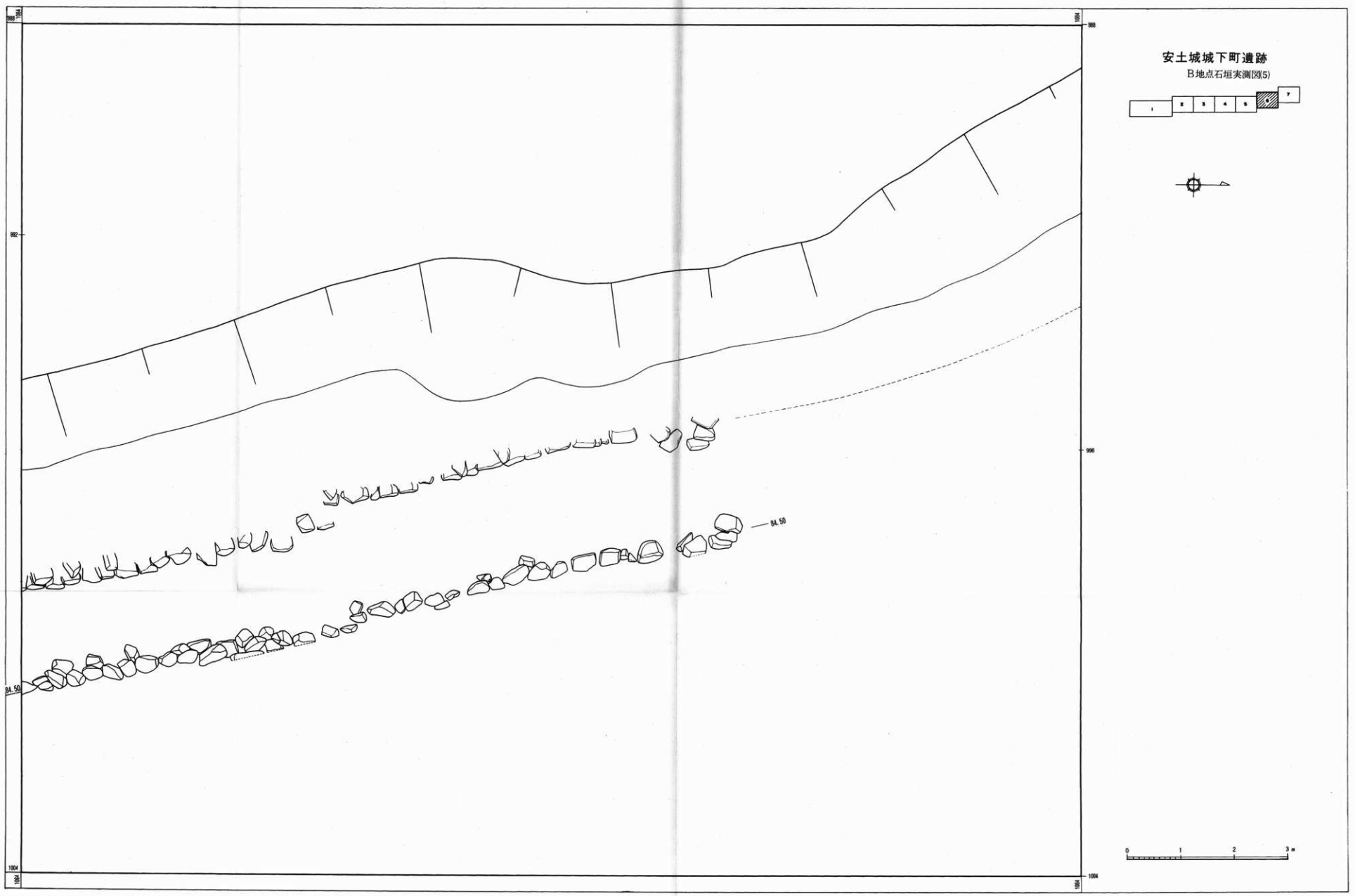
1000
1000

安土城城下町遺跡
B地点石垣表測図(3)

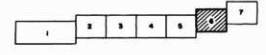


安土城城下町遺跡
B地点石垣実測図(4)





安土城下町遺跡
B地点石垣実測図(5)



安土城城下町遺跡
B地点石垣実測図(6)

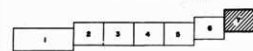


図 10

